



<34>

福村 俊治

思いが浮き彫りに

街づくりや団地再生では、そこに住む住民の意向や要望を聞き、計画に盛り込んでいくこと、つまり、「住民参加」の街づくり、団地づくりが大切である。沖縄県住宅供給公社で

は数年前から、建物の老朽化や団地再生のための調査、検討、計画を行ってきたが、都市計画道路の団地内通過や建て替え費用などの諸問題で再生計画はうまく進まなかった。その後、わたしたち豊見城団地再生研究会がこの計画に参加し、

まず最初に取り組んだのが住民意向調査である。琉球大学建築学科の学生の協力を得て、団地全戸(約千二百戸)に「豊見城団地の居住性・生活環境と団地建替えについてのアンケート」を配布。約半数の方々から回答を得た。主な回答は、交通や学校施設の利便性、緑の多さ、近隣住民とのつきあいの良さ、家賃の安さなどの利点と、建物施設の老朽化に伴う住みづらさ、ゴミ・放置自動車などの問題に対する懸念が挙げられた。また、多くの住民が「住み続けたい」

との強い要望を持っていることも分かった。そして、この結果を踏まえ「ワークショップ」が始まった。

このワークショップは、従来のように行政と住民が対峙して行政が一方的に計画案を見せ説明し、住民に理解を求めるものでも、逆に、住民が要求や反対意見を行政に突きつけようとするものでもない。団地の建て替えに関心を持つ多くの住民と公社の関係者、そしてわたしたち計画や設計の関係者が、対等にそれぞれの意見を出し話し合う場である。

熱気帯る話 2000

毎回参加者が多いため、三者が混ざり合っていくつかのグループに分かれ、話し合い、意見をまとめ、それを発表し合って、議論を進めた。住民の方々がこんな公園が欲しいと大きな紙に絵を描いたり、設計者がたたき台として大きな模型を持ち込んだりして意見交換し、約二年間十数回、「夢の団地づくり」にむけて熱心な話し合いが続いた。

持続性の力

かつてわたしがドイツのIBAエムシャーパーク地域計画の視察に行った時、次のような話を聞いた。ある敷地に公営の集合住宅を建設する計画が挙がる

完成後の維持管理もすっかり行われるようになるのである。

これまでの街づくりや団地づくりは、そこに住むことになる人々のことが十分考慮されず「単なる箱」として建設されてきた。こうして完成した単なる箱の街や建物に住んで、コミュニティのある街づくりや美しい住まい方を望んでも簡単にいくはずがない。なぜなら、それらは他人がつくった「仮の街であり、仮の住まい」なのだから。

美しい歴史的文化的な街や建物は、みんなが長年かかって大切に作り育ててきたものなのである。街づくり、団地づくりは住民参加と持続する愛着が大切なのである。

今回は、団地の老朽化と維持管理について述べる。
(チーム・ドリーム代表)



団地住民、公社、計画・設計関係者などが集まり、それぞれの意見を出し合った。このような住民参加のワークショップを2年にわたり重ねてきた。計画過程に住民が参加することにより、コミュニティーがはぐくまれ、愛着の持てる住環境ができていく

住民参加で夢を描く

愛着ある団地づくり